

戦前の『ときのこと』覚え書

室 田 保 夫

はじめに

「明治の文壇に福翁、福地、龍溪、鼎軒等の平易昌明なる文字の一異彩を放てるが如く、我が斯教文壇に在りて茲に数年汝々として倦まず、平明の筆を揮つて専ら下層の開拓に努め、明治の鳩翁を以て任ずるもの山室軍平氏あり、……略……氏が下界の情を搜り、人情の機微に接触し、緹暖簾の裡濁醪の傾けらるゝ所に、檐傾き土居おちくぼり病みほうけたる老婦苦吟の宿に、將た黒鴨に身をかためし勇しき帳場の車夫に、人生の秘奥を探りて一喝人の骨髓を剝ぐらむとの希望は決して一朝一夕の事にはあらず、氏は活きたる社会の觀察と共に、又故紙堆中にも遺珠をあさりぬ、吾人の有せし西鶴集は氏が所有の三馬集と交換せられし事ありき、惟ふに氏の心掛けは世人の予想の外にあらむか。」これは明治三六年二月の『基督教世界』第一〇一七号に掲載された紅炉庵主人の「基督教文壇管見(山室軍平君)」という文章の一端である。ここで著者は山室が平民的文学者として在ることとその為の一方ならぬ努力に対して敬意を払い、「明治の鳩翁」として、山田美妙と比較し、「山室氏は高邁の想を遣るに此の卑近の手段を用ゐるも、然も卑に失せず、俗に失せず、語らむとて其の語る所を尽くす」と、言文一致体文学への彼の功績を高く評価している。そ

の代表に『平民之福音』や『ときのごゑ』を挙げているわけだが、即ち「氏が主宰の下に成長せる『関』^{クワン}は、日本の伝道界には多くの貢献をなせるを信ず、吾人は氏の前路と共に健全なる発達をなさん事を切望せざるを得ず」と。

周知の如く、この『関聲』(『ときのごゑ』)は、日清戦争後の明治二八年一月に発刊され、月二回の回数で、救世軍が救世団と改称させられ、機関誌も『日本救世新聞』(後に『朝のひかり』)となるまで、戦前においても一〇六五号迄続いた日本の救世軍の機関誌である。そして、この『ときのごゑ』の多くはその指導者山室軍平により編輯されたか、或は指導の下に刊行されたものなのである。

ところで、この『ときのごゑ』は、日本の救世軍の動向や山室研究にとっては必要不可欠なものであり、従来からもキリスト教史のみならず、廃娼運動史や社会事業史の中で注目をされてはきたが、全巻を完全に見ることは不可能に近いものであった。しかし今度、救世軍日本本館所蔵本と山室家所蔵本(同志社大学人文科学研究所寄託)とを併せて不二出版より全巻復刻されるところとなり、漸くここにおいてその全体像を追うことが可能となった。

この小論は救世軍機関誌『ときのごゑ』についての書誌的考察と研究課題を中心にした筆者の覚え書である。時代は戦前に限定したが、これは山室の生存期間とはほぼ合致する。紙面は無署名記事を含め、山室の文章で多くが埋められており、「救世軍の山室か、山室の救世軍か」と呼ばれた理由も、この『ときのごゑ』にも表われているのである。

一 救世軍の来日と『関聲』の創刊

明治二八年四月、日本は清国との戦争に終結を遂げたが、この日清戦争は極東の小国日本が世界の人心を喚起するに充分な大事件であった。これと前後して、英国の救世軍本館に於いて、日本への伝道(開戦)を申し入れる者が本

国は言うに及ばず、日本人にも現れてきた。これを受け、ウイリアム・ブリス大將は十数人の士官を選び、愈々極東に派遣することになる。同年七月一四日、ロンドンのシティ・テンプルで任命及び告別会を開催したが、その席上ブリスは次の如く述べた。「往いて其の人民を愛せよ、それが出来ないなら、宜しく速に本国に召還せられんことを謂へ。世界の眼は御身等の上に注いで居る。往いて戦ひ、苦み、忍び、又あまた度涙を流さねばならぬ。しかも直ちに其の涙を拭ふて、人々の中に出でゆかねばならぬ」(『ときのごま』第七〇二号)。ライト大佐以下一行一四人はドイツ船ホーヘンゾーレン号に乗り、そして九月四日、横浜に到着したのである。彼らの方針は一つ「日本人をして日本を救はしめよ」。かかる方針に則り、あくまで日本人の主体性を喚起する為め、一行は和服を着し、日本食を食べ、日本建築の家に住み、日本での烽火をあげたのである。それは当時日本のマスコミが様々な評価、報道をしたように、極めて奇異の眼でみられ「風替りのドコドン連」(『日本』)とも評され一方では滑稽の域を出ないものであったが、一行達にとっては健気な真剣な態度であったのだ。来日した救世軍は九月二二日、東京神田のキリスト教青年会館で日本での開戦の集會を持ち、京橋区新富町に日本本營を設けた。そして、一〇月末、京橋区南金六町の新橋の袂に第一小隊を設置し開戦の火ぶたをきった。かかる中で、山室軍平は救世軍を訪れ、十一月三〇日、遂に入隊することになる。

当時山室は、平民伝道に志を抱き、救世軍来日前より関心を示していた。例えば同志社学生時代にブリスの『最暗黒の英国とその出路』(In Darkest England and the Way Out)を読んでいたし、石井十次との親交の中で救世軍についての種々の情報を得ていた。又、英国の救世軍機関誌 *War Cry* も松江のバックストンのもとで既にみせて貰っていた。そして何よりも「労働者の友」となり、「底辺民衆への伝道」を畢生の事業と覚悟していた点で、彼の素志と救世軍の精神とは極めて親和性を持っていたのである。

かくしてライト大佐以下来日した救世軍のメンバーは日本での伝道を着々と進めていったが、その機関誌たる『関聲』も愈々明治二八年一月二日に記念すべき第一号を発兌することになる。その第一号の「発刊の辞」をみてみると、文頭は以下の如く記されている。

吾が救世軍は到る処、その運動の進行したる国に於て、新紙を発行するの慣習あり、今や吾れらは日本に於て、その運動を始めぬ、されば茲に吾れらの事業を記録し、吾れらの目的を解説し、且又吾れらの運動法を弁明せんがために、新紙発行の必要従て起るを見ん、吾れらは確かに信ず、苟も吾れらの為さんとする所は、唯々神の光栄を期し、罪人の救済を求むるあることを、而して吾れらは、実に眼前この目的を持して、説教するが如くに、又採筆せんとす、他国に於ける吾れらの新紙事業に伴ふ神の祝福は、吾れらを激励して、此処にも亦、御手の加はる可きことを信ぜしむるもの也、

そして、プラムエル・ブースの言葉「善と悪とに對する、世界に於ける勢力の一機関として、印刷物の必要の意外なることは、人能くその感化力の際涯を計るを得ざるを以て知る可し」を引用し、こうした「文字事業」に救世軍が世界各地で積極的に着手していることを述べ、そして救世軍の「文学」につき次の如く論じている。

我が軍の文学は厳然非宗派的にして、又非政派的なり、由て基督教徒、及び彼等の事業に對して、或は攻撃し或は批評し、或は罵置するが如きことは、断じて吾れらの為さざる所なり、而して又その文学は普通人に向て、極單純なる言語を以て書かれ、簡人的宗教に関する、幾多の証明を以て満されたものなりとす。

このように「非宗派的」「非政派的」に中立的立場で、「普通人」に民衆に對し、「單純なる言葉」をもってわかりやすく伝えるところにその特徴を置くことが力説されているが、このことは爾來『関聲』(『ときのこと』)の編輯方針を終止貫いていくものである。

扱て、ここで第一号の内容について、少しみておくことにしよう。「発刊の辞」の外、「書記長の録事」「救世軍の定義」「少年軍」「入隊手続」等、主に救世軍についての説明、宣伝が主たるものである。例えば「書記長の録

事」には「救世軍は社会の改良と国家の繁栄を計る目的を以て進むものであります」、「救世軍は至る所貧民の友となり靈魂上と社会上の有様とを進めんため働くものであります」、「各国に在る救世軍々人たる者は罪の奴隸より救はれ且つ基督教に感化せられたる男女を以て組織せられたるものであります」と記されている。創刊号の紙面のサイズは縦四五センチ、横二九・三センチで、四頁構成となっており、この形は明治三八年の第二二二号迄継続する。題字は『ときのごゑ』でなく漢字で『関聲』と横書きされていて、「関」と「聲」との間には救世軍のマークが入っている。その下に日本東京救世軍と記載されている。

奥付によると発行兼編輯者は長坂毅であった。この長坂という人物につき、後年、山室は次のように回顧している。
 (『ときのごゑ』第八三二号)

長坂氏はたしか倫敦で、一時救世軍の士官候補生となつて居られたとかいふことで、日本に帰つて後、或る宣教師たちの賛助を得て、一張の天幕を手に入れ、それを携へて各地を巡り、救世軍の制服を着用し、「救世軍学」と名づくる小冊子売りつつそこゝで演説せられた。私共が同志社在学中、同氏は私共の学校にも来て其の礼拝堂で集會を営まれた。

この長坂の外、印刷者は高田乙三、発行所は救世軍仮本営(第三六号より救世軍本営)印刷所は秀英社である。毎月第一第三土曜日発行とあり、定価は一銭であった。途中毎週発行の意図もあつたが、結果的には創刊時より関東大震災等の例外を除き月二回発行されることになる。創刊号の発行部数は一五〇〇部程度であつた。この時の状況は、『関聲』第二号において「本月二日に生れたる『関の聲』第一号は週日を経ざるに忽ち我国の兄弟姉妹の間に散りて大なる結果を頭はしつゝあるなり而て我各士官及兵士等は街頭に行買し且伝道す尤も外国人の居留地外行買は法律の禁ずる処なるを以て我国兄弟姉妹の行買するものに随行伝道す聖靈の神も亦これに伴ひ給へり」と報じられている。第二号は二〇〇〇部刷つたが売残りを出した。創刊号より一年近く後の第二二号では、「千七百五十部を刊行するの

必要に迫られ」と記されており、「其発売の費用に至〔つ〕ては毫も万国本営の補助を仰かず毎月幾分の潤金を得つゝある事實は自らを証明するに足れり」と述べられていることから、ほぼ一年間は二〇〇〇部に満たず一七〇〇〜一八〇〇程度の部数が発行されており、万国本営からの補助はなかったようである。そのことは言い換えれば、その裏に編輯者や『関聲』の販売に於ける苦勞があったことを物語るものと言えよう。

扱て、長坂毅に代つて山室軍平が編輯発行人として登場するのは第一五号（明治二九年六月六日発行）からである。何故に長坂から山室にバトンタッチが為されたかについては『基督教新聞』第六七一号（明治二九年六月二日発行）に「救世軍に一時雇として働き居りし長坂氏は不都合の所以ありし為め今般解雇したりと云ふ」という記事があるが詳しくは不明である。一方山室は、家出した一四歳の時より築地活版製造所にて職工の経験があり、編輯作業に對し、かなりの知識があつたことも確かである。又、同志社の学生時代、即ち明治二六年一月、「将来ヲ夢想ス」という題の文中に「雜誌ヲモ発売シ我信ズル所ノ宗教主義ヲ主張シ、平民的ノ道德ヲ拡張シ日本ヲ挙テ世界ノ大國トナシ日本人民ヲ率テ大國民タラシムルニ至ラン事ヲ期ス」（『救世軍士官雜誌』三〇一六）と論じる如く、雜誌刊行に對しては大望を抱いていたことも窺え、この就任に當つてはかかる彼の素地も看過できないところである。後年山室は救世軍の草分け時代における編輯模様につき次のように回顧している。（『ときのこと』第一〇〇〇号）

私の如きも「ときのこと」の編輯の他に、士官養成所も受持つて、本営の事務も執る、各地の小隊を応援して廻る等、必要に迫られては、一人で八人芸を演じたやうなこともあり。或時上州辺に伝道に行き、帰つて来ると「ときのこと」のメ切り日が来て居つた。そこで机に向うて、大急ぎで筆を執り始めたのが、その日の午後の三時であつた。それから原稿を書いて、書いて、書きぬいて、不眠不休で努力し、全く書き上げたのが、翌日の午後の三時であつた。

『ときのこと』の刊行には、かかる編輯者の苦勞が背後に在つたことも止目しておかねばならない。

二 『ときのごゑ』について

創刊号より続いた題字の『関聲』がひらがなで縦書きの『ときのごゑ』に変わるのは明治三〇年一〇月一日発行の第四六号からである。即ち、前月を以て開戦二年を経て、新しく第三年目に入った一つの区切りの時でもあり、巻頭論文も「第三年度の救世軍」（第四四号）、「面目一新」（第四六号）、「前途の眺望」（第四七号）とそれに即応した論題が付されてある。また、月二回の発刊が一日と一五日に定着するのも第四四号からである。更に題字について付け加えておくと、『ときのごゑ』が横書きされるのが大正一二年の第六四九号からであり、それ以後ずっと続く。

救世軍では既述の如く、「白羽の使者」として機関誌の発行と文書伝道を重視するが、その販売（伝道）を行うのは軍隊及び兵士の役割である。第七四号（明治三十一年一月一五日発行）には「兵士の関聲売について」という項目の中、毎月一日と一五日にその前の一五日間に於ける『ときのごゑ』販売成績の報告義務を告げている。それは左記の雛形に依る。

関聲売の報告

一 関声第何号何拾部 兵士 何某

一同 改心者何某

右御報告申上候也

月 日 救世軍何々軍隊

大慰何某

そして、これに基づく各地からの報告は「鬨聲売腕くらべ」として第七六号から登場してくる。

『ときのご多』は創刊号より一〇年近くに亘って大版で四頁構成を保ってきたが、その紙面、体裁、内容等に於いて大きな変化が見られるのは明治三八年四月一日の第二二三号からである。この時期は日露戦争中であったが、山室は前年、ロンドンでの救世軍万国大会に出席し、戦場書記官ともなっており、山室の日本での指導的立場もかなり高くなってくる。この改変には山室の影響が背景に存したとも推察できよう。

さて、この号より『ときのご多』のサイズは縦三八・二センチ、横二六・五センチ、八頁構成となっている。その内容面についても前号において、「これ迄より一層多く感ずべき信仰上の事実談、悔改の物語、平易い聖書の講義、靈魂の養いとなるべき説教、論文、又罪人への警告等を載する積り」と予告を出している。そして子供の為に「絵入り教訓物語」を、仮名しか読めない人に対し「平仮名欄」を設け、教会も救世軍もない地方の人々の為に「通信伝道」の道を開き、一層挿絵を利用した「絵入基督教新聞」の特長を發揮し、救世軍の所期の目的たる民衆の為のキリスト教ジャーナリズムたることを目指すと記されている。

因にこの明治三八年四月からは救世軍機関雑誌として月刊の『戦場士官』（大正二年九月より『救世軍士官雑誌』と改称）が発刊されている。明治四〇年三月からは子供の為に月刊の『少年兵』が、新聞として昭和十一年七月より『救世軍下士官新聞』が出されている。

ところで、『ときのご多』を通観してみると、この新聞には非常に気の利いた「挿絵」が毎号掲載されていることに気づかされる。とり分け、明治末期から大正時代にかけて、生活感溢れる挿絵が描かれているのである。それは吉岡弘毅の息子、吉岡徹の筆になるものであろう。吉岡の「追憶」（『山室軍平選集』別巻、三一八頁）によれば、明

戦前の『ときのこと』覚え書

表一 『ときのこと』の編輯人等の推移

号 数	発行兼編輯者	印 刷 者	印 刷 所	
1~14	長 坂 毅	高 田 乙 三	秀 英 舎	
15~64	山 室 軍 平	高 田 乙 三	秀 英 舎	
65~70	山 川 俊 三	高 田 乙 三	秀 英 舎	
71~108	山 室 軍 平	高 田 乙 三	秀 英 舎	
号 数	発 行 人	編 輯 人	印 刷 者	印 刷 所
109~115	ヘンリー・ブラード	山 室 軍 平	高 田 乙 三	秀 英 舎
116~117	ヘンリー・ブラード	山 室 軍 平	大野金太郎	秀 英 舎
号 数	発行兼印刷人	編 輯 人	印 刷 所	
118~280	ヘンリー・ブラード	山 室 軍 平	秀 英 舎	舎
281~310	トマス・エステル	山 室 軍 平	秀 英 舎	舎
311~459	ヘンリー・ホツダー	山 室 軍 平	秀 英 舎	舎
460~506	ヘンリー・マ ッ プ	山 室 軍 平	福音印刷合資会社 東京支社(475~503)	
507~510	山 室 軍 平	指 田 和 郎	福音印刷株式会社	
511~532	デ・グ ル ー ト	山 室 軍 平	福音印刷株式会社	
533~648	山 室 軍 平	指 田 和 郎	福音印刷株式会社	
649~665	山 室 軍 平	秋 元 巳 太 郎	不	明
666~728	山 室 軍 平	指 田 静 子	不	明
729~1009	山 室 軍 平	秋 元 巳 太 郎	日東印刷株式会社	
1010~1065	植 村 益 蔵	秋 元 巳 太 郎	日東印刷株式会社	

注 第649号より第786号までは奥付不明のため、この間に関しては複製版『ときのこと』補巻に依拠した。

治三九年頃、山室は吉岡に「日本の宗教新聞は皆堅苦しいのみで、平民的じやない。高尚な説教は到底労働者に分る物じやない。挿絵を沢山入れて、チョット見て合点できるような新聞を作りたいと思う」と語ったと言う。吉岡は当時、明治学院に学んでいたが、銀座二丁目の本営に行つては、山室と話して、次の挿絵の意匠を決めたことを回顧している。ここにも、平民伝道に心がけた山室の思想や、一種の「絵入基督教新聞」を目指した『ときのこと』の方針を窺うことができよう。

『ときのこと』における発行人、編輯人、印刷人、印刷所の推移については表一のとおりである。第

三三四号より第三二八号の五号には仮編輯人として指田和郎の名前が記されている。発行所は創刊号より救世軍仮本営、第三六号よりは救世軍本営、第一一八号よりは救世軍日本本営となっており、その間、第五四一号より第五七四号までは救世軍日本仮本営となっている。

価格は創刊号より第二二二号までは一部一銭で、改変された第二二三号よりページ数も倍になったこともあり、二銭となっている。そして第五三九号（大正七年五月一日発行）より三銭となり、第五七四号（大正八年一月一日発行）より五銭に上っている。これら価格の改訂にはその時々理由をつけているが、いずれも物価の上昇が主たる原因となっている。因に大正九年以降の特輯号「禁酒号」は一六頁、一〇銭の特別価格である。

附録は昭和三年一月一日の第七八六号より、毎年ではないが一月一日発行の分に対して救世軍やキリスト教関係の美しい画がつけられた。

コラムについては、その時々かなりの推移がみられるので、主だった号数のコラムのみ記しておくことにする。改変される前号のコラムは「耳学問」「一語千金」「西洋だより」「手近い説教」「各地の戦況」で、第二二三号は、「実地経験談」「実物教育」「西洋だより」「一語千金」「手近き説教」「児供ばなし」「各地の戦況」「通信伝道」である。第五〇〇号では「社会雑観」「初心手引草」「実物教育」「実験の学校」「救世講壇」「聖潔の聖書」「各地の戦況」、そして第一〇〇〇号では「救世短言」「信仰読本」「回心談」「薬石言」「救世講壇」である。

『ときのご多』の発行部数は、当初は二〇〇〇部未満であったが、明治三十一年一月の第五二二号では四五〇〇部、明治三十三年一〇月の第一一六号では七二五〇部と報じられ着実に増加していることが窺える。以下、『ときのご多』の「売腕くらべ」等を通して推計をしてみると、第五〇〇号では一五〇〇〇部、第一〇〇〇号では、二五〇〇〇部程度出ているのではないかと思われるが確実な数字は今後の課題としたい。

『ときのご多』の執筆者だが、勿論これは軍友を含めて救世軍関係の人が多くを占めている。中でも長きに亘って編輯やその指導に当った山室軍平の文章が圧倒的に多い。新聞という性格から当然かも知れないが、無署名記事も多い。内容面から言えば、新聞の発行趣旨の如く、政治的な面は極めて少なく、宗教、道徳、説教的なものが平易に書かれている。それらには喩話が多く引用され、「明治の鳩翁」の形容も妥当性を持つが、一方くり返しも多い。

最後に記念号と特輯号とにふれておく。特輯号は、普段よりページ数を増大し、毎年「紀元節」の二月一日に刊行されるものであり大正五年より開始された。一方記念号（広い意味で）はその時々に応じて出されているもので、題字の次に「〇〇号」の文字が原則として入る。戦前の『ときのご多』には「水難救済号」（第三五三号）、「奉公人号」（第三六二号）、「御大典特別号」（第四七六〜第四七八号）、「山室大佐夫人記念号」（第四九五号）、「立太子式御記念号」（第五〇一号）、「震火災記念特別号」（第六八二号）、「救世軍創立者記念号」（第七八六号）、「第一千号記念」（第一〇〇〇号）、「軍人遺家族慰問号」（第一〇〇一号、第一〇四九号）等がある。

三 『ときのご多』の特輯号をめぐって

前章でも指摘したように『ときのご多』は、普通の紙面の外、不定期に刊行される記念号と二月一日刊行の特輯号があるが、ここでは紙幅の関係もあり、比較的広範囲な人々が執筆している特輯号に限定してみて、論題と執筆者、救世軍の動向等についてみておくことにしよう。

さて、最初の特輯号が発行されたのは大正五年二月一日の「博愛号」であり、一二頁からなり五銭であった。爾後この日をもって、特輯号が組まれる。この博愛号の趣旨は「世上の結核予防に関する注意」を促し、「銘々自衛に

注意することを奨励し、一方において売捌った純益金で「貧民結核療養所の費用を資けん」為めであった。当時「國民病」と呼ばれた結核は未だ治療において医学的にも未発達な状態で、とり分け貧困家庭と極めて密接な関係有していた。救世軍では大正元年、念願の救世軍病院の設立をみたが、更に結核療養所の設立に向けての資金を必要としていた。すなわち、『ときのごゑ』が「其の広めらるゝ一部一部は即ち頼りなき貧民結核患者の救済の資金となることを御記憶願ひ度いのである」と。この号の論題と執筆者は、「博愛衆に及ぼすべし」山室軍平、「肺結核病の注意書」北里柴三郎、「結核デーに際して諸君に訴ふ」マップ少将、「救世軍病院と結核」松田三弥、「貧病者の巡回救護に同行するの記」志立たき子、「日本に幾許の結核患者あるべきか」高田畊安、である。因にこの博愛号は○万部売ったとある。

大正六年の特輯号は「禁酒号」であった。救世軍では当初より伝道と矯風の一環として禁酒事業に対しては深くかわってきたが、ここにおいて初めて特輯号を出すに至った。山室による「何故禁酒を勧誘するか 禁酒号」『ときのごゑ』を発行する理由があり、この中で「紀元節の目出度い祭日に、世間では祝盃を挙げてこれを祝うという際、わたし共はかえつて禁酒の主義を拡張するために、此の日を用いようとする」と述べ、かかる行為こそ真に「紀元節を祝い、亦国家の為にも尽す」ものだと論じている。他の執筆者は以下のとおりである。「飲酒の害」大沢謙二、「酒は万病の母である」片山国嘉、「酒造廃業いろは歌」小西富右衛門、「禁酒は時代の要求なり」長尾半平、「日本人に禁酒を勧む」故ブース大將、「禁酒軍の勝利必せり」根本正、「今は実行の時代なり」森村市左衛門、「禁酒戦廿八年の回顧」デグルート大佐、「余の譲り受けし第一の遺産」小林富次郎、「飲酒は自殺の行為なり」安藤太郎、「能率増進と酒」伊藤一隆、「禁酒は税源を拡む」島田三郎。この特輯号は一二頁五銭であった。

さて、大正七年は「健康号」であった。発行の趣旨は主として「文明國民の三大敵なる酒と結核と花柳病」のこの

三大悪から如何に防禦していくかを訴えたものである。論題と執筆者を挙げておく。「健康号を発行する趣意」山室軍平、「三箇の提案」山室生、「国民保健の三問題に就て日本の婦人に訴ふ」デグルート夫人、「列強の落伍者と為る勿れ」安藤太郎、「徳利は読で字の如くならず」長尾半平、「酒の脳に及ぼす影響」三宅鉦一、「世界各国禁酒の大勢」山室軍平、「一瓶の昇承以て能く太平洋を消毒し得るや」松浦有志太郎、「犯罪と売淫と」小河滋次郎、「性欲の抑制は健康に害なし」藤浪鑑、「女子に対する礼節」三輪田元道、「我等は国民の三大敵と戦ふ」デグルート夫人、「道楽者を救ふ神あり」山室軍平、「売淫は花柳病よりも恐ろしき変性を誘致す」富士川游、「肺結核とは如何なる病か」北里柴三郎、「救世軍の療養所を訪ふ」堀内ます子、「或る患者の手紙」松田三弥、「結核予防の根本原則」原榮。この号も一二頁五銭であった。

大正八年は「勤儉号」である。例の如く、山室の筆になる「勤儉号を発行する趣意」が巻頭に登場する。この中で山室は「労働」の大切さを説きつつ、

近來我が日本に於ても、労働者保護の為に種々なる社会政策が講ぜられて居り、数年来不完全ながら工場法の実施を見、今は失業者の爲の職業紹介、小民の爲め住宅改良、其の他公設市場、労働保険、労働組合等の問題が真面目に研究せられ其の或者は漸く実行の緒に就かんとして居る。何れも喜ぶべきことの至である。併し乍ら私共はそれと同時に、他の一面に於て、労働者自ら其の品性を高め、其の自尊心を養ひ、飽く迄も自ら助け自ら立つやうにといふことを奨励したい。

と述べる。何故かと言えば「幾ら外部の境遇事情が改まつても、肝心な人間が改まらねば之に由て利益する所が少ないのみならず肝心な人間が改まらねば、外部の境遇事情の改善さへ中々思はしく行かぬ事が多いからである」と論じてるのである。ウィリアム・ブースの「先づ人を造れ、されば彼等は自らに適當したる境遇を造るであらう」を引用し、そしてこの号は「殊に宗教上の信念に土台を置いた勤儉の徳を鼓吹することになつた」と表明している。この山室の論文の外は「奮闘主義の極地」森村市左衛門、「貧富論」生江孝之、「酒と貞操とは油と水の如し」安藤太郎、「徳

性の伴はざる富は幸福を害ふ」島田三郎、「青年に酒は大敵である」長尾半平、「働かぬ人の前途は暗黒なり」浮田和民、「人は喰ふ為のみに働くか」留岡幸助、「労働は幸福の必要条件なり」故ウィリアム・ブリス、「同胞の福祉に対する救世軍人の責任」デグルート少将、「勤労の人耶蘇」山室軍平、「酒を勧める親切は最大の不親切なり」江原素六、「文明は精力の貯蓄なり」新渡戸稻造、「稼ぐに追ひつく貧乏なし」山室軍平、「僥倖を希ふ心は盜賊の心」安部磯雄、「職業に貴賤ありや」棟居喜久馬、「貯蓄奨励の真義」天岡直嘉、「華を去り実につけ」羽仁もと子、「聖潔と家庭」デグルート夫人等が掲載されている。この号は一〇頁であるが定価は不明である。

扱て大正九年から昭和十五年までの二一年間は、全て「禁酒号」であり、大震災後の大正一三年二月一日発行の禁酒号を除いて二月一日に発行されている。山室はその各号に発行の趣旨を書き、且つ二・三の論文を書いていて、この二一年間の特輯号だけでも山室の署名入り論文は六〇近くに達する。これをみても如何に山室の指導性の位置を証明するものである。因に、大正九年以降の「禁酒号」の執筆者と執筆回数（論文の数）の順をみておこう（アンケートの回答等は除く）。長尾半平が一〇回でトップ、七回が生江孝之、青木庄蔵、伊藤一隆、高田畊安、六回はブリス大將、片山国嘉、五回はエバンゼリン・ブリス、根本正、大原伴吉、田子一民、牧野虎次、松浦有志太郎、林歌子、安藤太郎、島田三郎、関根文之助、四回はウィリアム・ブリス、三田谷啓、賀川豊彦、田中龍夫、林龍太郎、阪谷芳郎、守屋東、三回はデニス少将、帆足理一郎、中里介山、江原素六である。その他二回執筆の著名な人として、田川大吉郎、内村鑑三、安部磯雄、杉山元治郎、本間俊平、原胤昭、吉岡弥生等がいる。これら特輯号の執筆の人々は、山室の交友関係の広さを物語るものでもあろう。

四 『ときのこと』が語りかけるもの

救世軍の機関誌という、一見取組みにくさを感じざるを得ないこの新聞はかくして今我々の眼前に全巻を呈している訳だが、日清戦後社会、一九世紀末に誕生し、日露戦争、大正デモクラシー、米騒動、関東大震災、昭和恐慌、一五年戦争と連綿と続く日本近代の流れの中で、この紙面は我々に一体、何を語りかけてくれるのだろうか。言い換えれば我々は、今これを如何に利用していけばいいのだろうか。

先ず、この『ときのこと』が山室軍平という人物研究に果たす役割の大きさは言うを俟たないところである。戦前から戦後にかけて顕彰風な山室の伝記に代わり、昭和四〇年代より、山室武甫『人道の戦士山室軍平』（昭和四〇年）三吉明『山室軍平』（昭和四六年）高道基『山室軍平』（昭和四八年）等の著作が刊行され、山室研究は大きく前進した。しかしこれらの研究も、資料的制約の為めか、充分に『ときのこと』を活用しているとは思われない。山室軍平については戦後、『山室軍平選集』全一卷、が出版されたが、その中には「著作年譜」はあるが「論文年譜」はない。基礎的な資料として、速かに「論文年譜」や山室の消息を知る詳しい「消息年譜」が待たれる。山室研究にとって『ときのこと』は内村鑑三における『東京独立雑誌』、『聖書之友』、山路愛山における『独立評論』、海老名弾正における『新人』、『新女界』、柏木義圓における『上毛教界月報』、或は留岡幸助の『人道』等々の如き意味を有するものと言わねばならない。かかる意味から『ときのこと』は山室研究にとって、資料の宝庫としての意味からも、基本的文献であることは言うまでもない。

次に『ときのこと』が救世軍の機関誌としてあることから、当然、これが日本の救世軍の研究に果たすべき役割を

指摘しなければならぬ。救世軍の通史的研究としては秋元巳太郎の『日本に於ける救世軍七十年史』全三卷（昭和四〇年）があり、最近、戦後の救世軍史とも称せる吉田信一編『神の国をめざして』（昭和六二年）が刊行された。勿論山室自身による『救世軍二十五年戦記』や『救世軍略史』等の著書もあるが、いずれにしろ、『ときのごゑ』を中心的文献として詳細な救世軍史の研究が俟たれるところである。

又、『ときのごゑ』が我々に重要な資料を提供してくれるのは、中央に於ける活動だけでなく、各地の小隊活動であり、それは「各地の戦況」「戦場だより」等のコラムを通してほとんど毎号報告されている。こうした地方小隊の活動を地域社会との関連の中で如何に把えていくかも今後の課題であると言えよう。そして救世軍関係の人物研究も『ときのごゑ』は可能にさせてくれる。それらは生涯救世軍人として働いた人、或は一時期救世軍に入隊し、思想的影響を受けた人、同情を寄せた人々様々である。思いつくまま列挙すると、山室機恵子、矢吹幸太郎、山田弥十郎、大原伴吉、鶴原誠蔵、松田三弥、岩佐倫、村松愛蔵、須田清基、金森通倫、小林政助、岡崎喜一郎、藤原暲夫、升崎外彦、森川抱次、永島与八、田辺熊蔵、こういった人々がすぐ想い出されてくるし、一方、地方には無名ではあるが、注目すべき仕事を残した人々も多数埋もれているだろう。

三番目として、救世軍の社会運動、とりわけ分けて廢娼運動をみていく時、『ときのごゑ』は貴重な資料を提供してくれる。従来山室と廢娼運動を論じたものとして、小倉襄二「廢娼論の輪郭」（『キリスト教社会問題研究』第六号）等があるこの問題が本格的に登場してくるのは、明治三三年八月一日発行の第一一二号からであり、この号には「女郎衆に寄せる文」やブラード大佐による「我醜業婦救济所と出獄人保護所」と「墮落婦人」等の文章が掲載せられ、この八月一日号は以降数年宛ら、該問題の特輯号的なものとなっている。この時期はモルフィ（U.S. Murphy）の自廢運動に代表される如く全国的に廢娼運動が展開された時であった。救世軍はこの『ときのごゑ』を手にして、新吉

原や洲崎、品川の遊廓へ進軍していき、樓主側と激しい戦闘をしていくのである。又、救世軍は醜業婦救済所を設け、婦人の保護に努めた。こうした廃娼運動史における救世軍の活躍はこの『ときのごゑ』で沢山みることができ。そしてこの廃娼運動史や女性史としての『ときのごゑ』の位置づけは、他誌、例えば『女学雑誌』や『廓清』『婦人新報』等との比較の中で論究していかねばならない課題である。

四つ目として、救世軍の社会的実践をみていく時、廃娼運動と共に重要な位置を占めているのが社会事業、とり分け民間社会事業としての位置であろう。例えばこれについては戦前において竹中勝男が「近世日本社会事業史に於ける山室軍平の足跡」『社会事業』(二四一七)が、戦後においては三吉明が「山室軍平と社会事業」(『日本歴史』第二五四号)、「救世軍の社会事業と山室軍平」(『北星論集』第八・九号)等で山室の思想と関わりで論じられてきた。しかし、これらも総論的な性格は免れず、更に個別的に社会事業について究明していく必要がある。例えば『ときのごゑ』第四一六号より第四三二号まで連載された「社会事業館めぐり」という記事に代表される如く、救世軍の各施設の個別的な施設史研究である。すなわち、それは免囚保護所、婦人ホーム水夫館、労働寄宿舎、大学殖民館、救世軍病院、結核療養所、愛隣館等である。また、貧困家庭への巡回救護活動、「慰問籠」運動、或は社会鍋等の社会的活動、火災や地震、風水害の救援活動、更には大正一一年八月よりの児童虐待防止運動への関わり等々、救世軍の幅広い社会事業活動を個別に追究していくことが必要である。

その他、第三章でも紹介したように、特輯号における禁酒論を中心とした矯風関係の記事にも事欠かない。そして、成田龍一が「山室軍平の都市事業」(『史観』一〇五号)として、都市事業という観点から、或は佐藤茂子(とく)が「闇黒に住む民」とともに(『近代日本の生活研究』所収)という論文において民衆生活史研究の立場から山室を把えたことは、民衆史や社会史の関わりで更に『ときのごゑ』の利用を拡げていくことになるだろう。

五 結びにかえて——『ときのごゑ』の休刊

日本救世軍の指導者山室は昭和一五年三月二三日、六七歳の生涯を閉じた。そして、その死後数カ月後、救世軍は機構の刷新を余儀なくせられる。救世軍は救世団と改められ、『ときのごゑ』は九月一日号より『日本救世新聞』として改題された。ここに戦前における『ときのごゑ』は前月八月一五日発行の第一〇六五号をもって休刊することになる。号数は継承されたが、その九月一日の第一〇六六号には『ときのごゑ』改題』として次のような文章が掲載されている。

去る四十数年間、救世軍公報「ときのごゑ」は、救世軍の内外多数の方々から愛読されて来ました。その有形無形の御援助に対して、厚く御礼を申し上げます。皆様の耳目に親しまれて来た此の「ときのごゑ」は今回「日本救世新聞」と改題することゝなりました。勿論、これは従来の救世軍の機構を刷新し、国家の進運に順応して、更に伸展する為であります。

そして、新体制に「即応して、国家の繁栄、新東亜の建設に貢献」しなければならないことを披瀝している。因に『日本救世新聞』は昭和一七年一月一五日の第一〇九九号より『朝のひかり』と改題せられ、第一一一五号（昭和一七年九月一五日発行）まで続く。そして戦後、昭和二十一年二月一日に『ときのごゑ』は復刊されるが、その号数は第一〇六六号からであった。このことに我々は注目しなければならないだろう。

ブラムエル・ブースは『ときのごゑ』につき、「これは使者である。神の真理と愛との使者である。全人類に対する平和と好意との使者である。同情と友情との使者である。略言すれば白衣の宗教の白羽の使者である」と述べた。同じキリスト教系ジャーナリズムとしても、『六合雑誌』や『新人』等の華やかさはないにしても、日本の『ときのごゑ』

「こと」は、「神と平民の為に」をモットーにした山室指導の日本救世軍が、近代の中でややもすれば疎外され、光が当てられなかった人々に対して、如何に福音と救済の手を差しのべていったかを地味ながらも我々に刻明に残してきているのである。『ときのこと』は、各社会福祉施設に、貧困家庭に、刑務所に、紅灯の廓に、山間の僻地に、更に、海を越えた日本人移民の中に、この一〇〇年近い歳月の間、確実に発射され、そして人々の胸に刻まれ残されているのである。それは「明治の鳩翁」の名に値するが如く、山室軍平という一大傑物の平民伝道にかけた一つの為せる業であったろうし、そしてそこには多くの無名の「兵士」達の献身的な働きがあったことに外ならないのである。

(むろた やすお・高野山大学文学部助教授)